

—あとがき—

克己殉公の継承

日本医科大学大学院侵襲生体管理学（救急医学）

日本医科大学附属病院高度救命救急センター

横田裕行

この度の大震災によって多くの人命が失われました。心よりお悔やみ申し上げます。また、現在も避難所や仮設住宅で生活を強いられている皆様、被災された皆様にお見舞いを申し上げます。

今回、このような特集号の企画をお願いしたところ、その趣旨を深くご理解いただき賛同頂いた日本医科大学医学会雑誌主幹内田英二教授に深く感謝をいたします。

さて、災害対応に関する議論で必ず遭遇するのが「災害サイクル」という概念である。この概念は、発災直後の急性期は復旧・復興を集中的に行い、安定化した後に（silent phase）次に来る災害に備え社会基盤を再構築し（Prevention and Preparedness）、来るべき災害に備えるという考えである。そして災害が起こり、このサイクルを繰り返し、災害に強い社会を作り出して行くのである。今回の東日本大震災で活躍したDMAT（Disaster Medical Assistant Team）や様々な医療支援チームは、阪神淡路大震災の教訓を活かしてPrevention and Preparednessの考えを災害医療の分野に導入した結果である。したがって、新たな災害に向けて今回の経験や教訓を記録として留め、それを活用してさらに進化した体制を作り上げて行くことが今後求められてゆく。そのためにも本学が行った今回の医療支援の経験を記録として留め、社会やわれわれの後輩に伝えてゆくことが重要である。

2007年に大阪で開催された日本医学会総会で災害医療の講演をする機会があった私は、本学図書館で資料を集めていた折に、「日本医科大学15年誌」に「関東未曾有の大震災」として関東大震災の記録が残っていることを発見した。記録の一部は日本医学会総会で発表した。その内容にはこの度の東日本大震災への対応と共通する部分が多く、大変参考になる資料であった。以下は同誌の一部抜粋である。「此の非常時に際し、本院は入院患者を徹底的に保護治療する一方、震災傷病者救療の為救護班を組織し醫員看護婦を内外勤務に區別し醫員二名及至一名看護婦二名を一組として各三組を編成して、（中略）、九月一日午後四時頃より徹宵して二日に及び其の扱ひたる傷病者は實に千有餘名に達した。（中略）震災と同時に痛感したのは食料品、衛生材料品、薬品等の缺乏（けつぼう）である。（中略）外科手術室は全體に亀裂を生じ危険の状態となり賄所（まかないどころ）竝（ならび）に食堂下の崖約十三間程崩潰した。」同誌に書かれている内容は僅かであったが、本学の大先輩が我々と同じ思いで災害医療支援をしたことを読み取れ、まさに災害サイクルの概念を再認識させる内容であった。

本学の学是は「克己殉公“わが身を捨てて、広く人々のために尽くすこと”」である。また、野口英世博士の眠る墓碑には“Through devotion to science, He lived and died for humanity”と書かれている。大先輩によって築かれた建学の精神は、東日本大震災の医療支援でも証明されたように見事に実践され、そして確実に継承されることを確信する。